

紅花学園の騒動

広田弦一

プロローグ

男は茂みの中から様子を窺った。辺りは水銀灯の鈍い明かりが寝静まった夜の公園を照らしているが、それは、人の姿を識別するのに差し支えがなかった。

男は人影がないことを確認すると、さっと茂みから躍り出た。そして、何気ない仕草で歩き出した。上着の肘のところに付いている土を払い落したが、完全には落ちなかった。だが、元々暗い色をしていた上着は、こびりついた土を目立たなくしていた。

男はしばらく歩くと、やっと呼吸を平静に戻すことが出来た。

しかし、擦れ違いに誰かと会えば、幽霊が歩いていると思ったかもしれない。

しかし、幸いにも、誰とも出会わなかった。

茂みの中に横たわっている少女は、もう思い出になりつつあった。あの愛くるしかった少女は、後少しで冷たくなるに違いない。

男はやがて通りに出た。そして、何気ない仕草で、歩き始めたのだった……。

「ただいま！」

奈保子は、リビングルームに入って来ては、鞆をソファの上に投げ出した。そして、
「疲れちゃったよ。冷たいものない？」

「冷蔵庫にコカコーラが入ってるよ」

母の良子は、編み物をしてる手を止め、朗らかに言った。

「また、コーラ。オレンジジュース飲みたいよ」

「だったら、自分で買ってくればいいじゃないの」

「ちえ！ サービス精神がないんだから！」

奈保子は冷蔵庫からコカコーラを取り出し、グラスに注ぐ。

「美味しい！」

「あんたが、コカコーラが好きだから、入れておいたの」

「すみません」

奈保子はペロッと舌を出した。

「どうだった？ 千佳ちゃんの具合？」

「大分良くなったみたいよ。おばさんがそう言っていたよ。もう少しで退院出来るそうよ」

「それはよかったね。受験で大変だから、いつまでも休んでいられないからね」

「心配ないよ。千佳ちゃんは優秀だし、私がノート貸してあげるもん」

「ノートを見たって、先生の話の聞かないと、分からないよ」

「私が教えてあげるもん！」

「あなたの説明って、どんなのかしら。1 + 2が4になったりして」

「馬鹿言わないで！ 私の成績、知ってる？」

「200人中、100番でしょ。これじゃ、大学行けないよ」

「私、短大でいいよ」

「短大だって、その成績じゃ、受かんないよ」

「じゃ、今度の模試、30人抜いてやるから！」

「30人じゃ駄目！ 50人抜かなきゃ！」

「勝手なことばかり言うんだから...」

奈保子は鞆からノートを取り出し、パラパラと捲った。すると、白い封筒がさっとノートから滑るように落ちた。

奈保子はその封筒に心当りなかった。それで、首を傾げた。

そんな奈保子を見て、良子は、

「どうしたの？」

「何でもないよ」

奈保子はそう言うと、二階に行き、ベッドに腰を下ろした。

そして、改めて、その白い封筒に眼をやった。しかし、やはり、奈保子には記憶のない封筒だ

った。

しかし、とにかく、封を開けてみた。

すると、便箋が入っていて、その便箋には、このように記されていた。

〈これ以上、彼に近付かないで！ 彼は私のものよ！〉

「何だ、これ...」

奈保子は眉を顰めた。そして、封筒を机の上に置くと、ラジカセのスイッチを点けた。それは、奈保子のお気に入りの曲だった。

「最高！」

奈保子は思わず悦に入ったような表情を浮かべ、そして、改めて封筒を手に取り、便箋に書かれていた文章を見入ったが、やはり、何が何だか分からなかった。

それで、封筒を机の引出しに仕舞った。

「今日は何曜日だっけ」

奈保子の机に置かれているカレンダーにはマーカーが塗られていた。お気に入りのラジオ番組を聴き逃さない為だ。

「水曜か。じゃ氷室の歌番組、明日だな」

奈保子は、ベッドの上に大の字になった。

すると、階下から、

「奈保子！ お風呂に入らないの」

という声が聞こえた。

それで、奈保子は机の上に置かれた置き時計に眼をやった。

すると、八時半だ。

「入ります！」

そう言うと、奈保子はパジャマを手に、階段を駆け下りた。そして、良子に、

「パパ、まだ帰ってないの？」

「今日も遅いらしいわ」

「最近、いつもね」

「仕事が忙しいのよ」

「浮気してるんじゃないの」

「まあ、この子ったら！」

良子は顰面をする。

「入ります！」

奈保子は衣服を脱ぎ、素っ裸になると、お風呂に入った。そして、湯船に身を浸した。

「ああ...、気持ちいい！」

正に奈保子は上機嫌だ。

すると、その時、

「あなたったら！」

という良子の甲高い声が聞こえた。そして、

「勝手にしてください！」

という声が出たかと思うと、その後、良子の声は聞こえなくなった。

やがて、奈保子はお風呂から上がり、パジャマに着替え、良子の前に来ると、

「ママ、さっきパパと電話してたでしょ」

「どうして分かったの」

「だって、あんなに大きな声を出すんだもの」

「……」

「何だか、ママ怒っていたみたいね」

「あなたには関係ないの」

「分かった。やっぱり浮気してたんだ」

「少しは静かにしてなさい！」

「教えてったら！」

「パパはね。泊まりなんですよ。会議が長引き、帰れないから、泊まって来るって」

「何だ。そんなことか」

「そんなんことじゃないよ。ホテル代、会社から出ないそうよ」

「家計の遣り繰りに苦労しますっていうことか」

「そうよ。こんなことが、毎日続いてみなさい。あなただって、おちおちしてられないよ」

「短大、行けなくなるっていうの？」

「そうは言っていないよ。でも、少しは家計のことも頭に入れなきゃね」

「つまり、バイトしろっていうことか」

「あんたは、無駄遣いしなければいいのよ」

「おんぼろの服ばかり着ろって言うの？」

「そこまでは言わないけど。あら！ いけない！」

と、良子は急いでガスを止め、鍋の蓋を開けた。すると、鍋の底から、焦げ臭いにおいが溢れ出て来た。

「ママって、ドジね」

奈保子はそっと笑った。

「行って来るね」

元気の良い掛け声と共に、奈保子は玄関扉を閉めた。

「行ってらっしゃい！」

ママの決まり文句だ。奈保子はこの「行ってらっしゃい！」以外の言葉を聞いたことがない。

でも、その声を聞くと、奈保子は妙に元気付けられる。

奈保子は今、青春真っ盛りといったところか。

「奈保子、おはよう！」

「おはよう、弘子！ どうしたの？ 今日はいやに愉しそうじゃない」

「さすが、奈保子！ いい勘してる！」

「何かいいことあったのね。教えて！」

「駄目、駄目。奈保子、口が軽いから」

「絶対に誰にも言わないと約束するよ」

「本当？」

「親友の私の言うこと、間違いなし！」

奈保子が弘子にこの文句を言うのは、今回で三回目だ。もっとも、過去の二回は奈保子の言葉を信用した方が馬鹿だった。

「東南学園の田中君とデートの約束をしたのよ」

「嘘！」

「本当よ！ 今度の日曜日に遊園地に行く約束をしたのよ」

「やったね！ 弘子！」

「奈保子は小倉君とはうまく行ってるの？」

「あいつはただの犬よ！」

「ただの犬で悪かったな！」

「きゃー！ 驚かさないで！」

奈保子にとってただの犬でしかない小倉紀夫が、いつの間にか奈保子と弘子の横に並んだのだ！

「だって仕方ないじゃないか！ 始業時間が同じなんだから！」

東南学園の小倉紀夫と紅花学園の河辺奈保子と江藤弘子が通学途中に出くわしても何ら不思議ではない。両校は隣り合わせなのだから。但し東南学園は男子校で紅花学園は女子高だ。

「CD、持って来てくれた？」

奈保子は紀夫に眼を向けて言った。

「いけねえ！ 忘れちゃった！」

紀夫は気まずそうに頭を掻く。

「あんたに貸すと、いつもこうなんだから！」

奈保子は些か不満そうだ。

「そう、怒るなよ！ 奈保子こそ、文庫本、いつ返してくれるんだい？」

「いけない！ あれ、まだ読んでないんだ！」

どっちもどっちだ。

「バイバイ」

やがて、奈保子は紀夫に手を振った。そして、腕時計を見た。

「弘子、急ごうよ！」

二人は校舎の中に走り去って行った。今、八時二十五分。始業時間まで後五分だ。

その二人の様子を、その男は黒いサングラスの眼で食い入るように見詰めていた。少し離れた所から、その男が奈保子と弘子のことをじっと見詰めていたことを誰が気付いただろうか？ その男はやがて、こう呟いた。

「次はあいつだ」

「リーン、リーン！」

と、チャイムが鳴った。昼休みだ。紅花学園は女子高だけあって、昼休みの歓声は相当なものだ。

「お腹、空いちゃったよ。グーグー鳴ってるよ」

とか、

「私、痩せようと思ってるの。でも、気持ちだけよ」

と言っでは、二人分のお弁当を広げた娘もいる。

奈保子も食べ盛りの年齢の為に、食欲は旺盛だ。

「食欲の秋なんて、関係ない！ 食欲の春夏秋冬よ！」

と言っでは、人眼も憚らずにお弁当にぱくつく。これが、男女共学だったら、もう少し人眼を気にしたのかもしれない。

「弘子、田中君と遊園地に行くって、本当？」

箸を止めては、奈保子が訊いた。

「本当よ、嘘じゃないよ」

「そう……。でも、気をつけた方がいいよ。田中君は菅原さんのお気に入りでしょ。菅原さんに知られたら……」

「大丈夫よ。分かりはしないよ。それに、田中君も菅原さんとは何もない仲だと言ってるし」

「だったらいいけど……。でも、心配だわ」

「奈保子こそ、彼氏、つくりなさいよ」

「私、男なんて興味ないわ」

「強がり言って！」

芝生に腰を下ろし、お弁当を食べている奈保子と弘子の前を五人の女生徒を従えた菅原景子が通り過ぎて行った。

「凄い貫禄ね」

弘子は眼を大きく見開いた。

「学園の女王って感じね」

「仕方ないよ。親が社長で、一人娘だから」

「それを言わないの」

「私たちと違う世界の人間って感じね」

「よお！ お二人さん！」

「こんにちは、先生！ 今日も赤いネクタイ、似合ってますね」

と、奈保子には珍しく褒め言葉が出た。といっても、相手は、数学の教師、青木雄介だ。雄介は昨年教師になったまだ二十四歳の童顔の教師だ。

「数学の宿題、終わったかい？」

と、雄介はにやにやした。

「先生！ 乙女の食事、邪魔しないでください！」

「すまん、すまん。実は訊きたいことがあってね」

と、奈保子を見やっては言った。

「じゃ、私、失礼しようかな」

と、弘子。

「いいのよ、気にしなくたって」

奈保子は弘子を見やっては言った。そして、雄介に眼を向け、

「何ですか、訊きたいことって」

と、奈保子はいやに真顔で言った。

「いや……、その……」

と、雄介は些か顔を赤らめた。

「はっきりと言ってください！」

まるで、教師と生徒が逆だ。

すると、雄介はいかにも真剣な表情を浮かべては、

「千佳ちゃん、どうしてるかな」

「プー！」

奈保子は思わず嘔き出してしまった。

「何だ、そんなことですか」

奈保子は笑いながら言った。

「僕にとっては、重大なことなんだ」

と、雄介は神妙な表情で言った。

数学の教師といっても、まだ昨年教師になったばかり。学生時代のアルバイトで一緒だった奈保子の従姉妹の千佳に一目惚れ。

デートに誘っても応じてもらえず、その内に大学を卒業し、教師になったというわけ。

それはそれとして、たまたま何気なく雄介が眼にした奈保子が持っていた写真に、奈保子と千佳が写っていて、雄介は驚愕し、また、感銘し、奈保子に写真に写ってる千佳を指差し、

「この人、何で君と一緒に写ってるの？」

と、奈保子に訊いたところ、

「この人、私の従姉妹なの」

と言われてしまった。

〈ラッキー！ この学校の教師になってよかった！〉

と、雄介は運の良さを喜んだというわけだ。

しかし、その千佳が病気で入院していると聞き、心配で夜も眠れないという本人の弁である。

「心配ないよ、間もなく、退院すると言ってたよ」

と、奈保子は笑いながら言った。

「待たせたね」

田中比呂志は、息を切らせながら言った。

「そんなに待たなかったよ」

と、弘子は言った。が、実際には二十分程待ったのだ。

「ごめんね。バスが遅れちまって……」

と、比呂志は頭を搔く。

「行こうか」

二人は手を繋いで歩き出す。

遊園地はすぐそこだ。

「あー、美味しかった」

大藪治子は、さも満足そうに息をついた。たった百二十円のオレンジジュースがこんなに美味しいとは！

そんな治子は自動販売機を後にし、通りに眼を向けた。

「あれ？」

治子の眼付きは忽ち真剣になった。

あの後姿は江藤弘子に間違いない！ 何しろ、同じ学校の同じクラスなのだから。

そして、治子の眼は弘子の隣を歩いている男に移った。何処かで見たような気がするのだが……。しかし、後姿なので、何とも言えなかった。

だが、

「あれは、田中比呂志に間違いない！」

「キャー！」

弘子は比呂志の腕にしがみついた。

比呂志とはいえば、早く時間が経ってくれればと思った。しかし、後一回転ある。

「ああ、怖かった」

弘子はそう言った割には、妙に生き生きしていた。しかし、比呂志はぐったりだ。

「ああ、疲れた」

と言った言葉にも元気がない。体重が二キロも三キロも減った気がする。宙返り三回転のジェットコースターがこんなに怖いものだったとは……。

「弘子ちゃん、キャー、キャー言って騒いでいたけど、元気いいね。僕なんて、死ぬかと思った位だったよ」

「あら、比呂志君が横にいたから、私、気絶せずに済んだのよ」

「女って、よくぞあんな金切り声を出せるものだよ。弘子ちゃんを見てて、つくづくそう思ったよ」

「男って、意外と憶病なのね。比呂志君を見てそう思ったわ」

「こいつ！」

二人は笑った。

「休憩しようか」

二人はベンチに腰掛けた。

「コーラ、買って来るよ」

比呂志はそう言うと、売店でコーラを買って来ては、弘子に渡す。

「ありがとう」

弘子は笑顔でコーラのカップを受け取った。

あれは、三ヶ月前のことだった。

「姉ちゃん、俺と今晚付き合えよ」

頭を金色に染めた人相の悪い男が弘子に詰め寄った。

「嫌です！ あっちに行ってください！」

白いワンピースに身を包んだ弘子は、震えながら言った。

「何だと！ 思い上がりやがって！ この女！」

こんな場所に来なければよかった。酒場、スナック、ゲームセンター、その他、色んな娯楽施設が連なるK町。パパとママが旅行中なのをいいことに、こんな場所に興味本位で、しかも、一人で来るなんて……。全くどうかしてる。

しかし、悔やんでも遅い。この金髪男、弘子の傍らを離れようとしな。歩いても歩いても、ひっついて来る。

駆け出せばいい！ 喫茶店に入ればいい！ でも、何処までもついて来る気がする。

すると、その時、突然、青いジャケットを着た弘子と同年齢位の若い男が現われた。

「君！ この娘に手出しするな！」

「何だと、こいつ！」

「この娘に手を出したら、僕が承知しないぞ！」

「何だと！ このくそ餓鬼野郎！」

と、その金髪男が殴り掛かろうとした。

しかし、青いジャケットの男の拳が金髪鬼の腹に突き刺さるのが先だった。

「いてて……」

金髪鬼は腹を抱え込んだ。そして、

「こいつ！ 覚えてろ！」

と、捨て台詞を遺し、金髪鬼は去って行った。

「君、大丈夫かい」

「ありがとう。助かったわ。でも、あなた、誰？」

「俺、東南学園の田中比呂志っていうんだ」

そして、その時以来、弘子と比呂志は、付き合うようになった。しかも、二人の学校は、東南学園と紅花学園という隣同士。正に運命的な出会いだった。

「弘子ちゃん、三ヶ月前のことを覚えてる？」

「あの時はありがとう。比呂志君がいなかったら、私、どうなっていたか……」

「K町に一人で出掛けるなんて、どうかしてるよ」

「パパとママが旅行中だったの。それで、あの日、何だか気分が滅入っていて……。それで……。ママはK町には行ってはいけないと言われてたんだけど……」

「僕もそう思うよ。」

「でも、比呂志君はどうして行ったの？」

「ちょっと、寄り道しただけなんだよ」

「寄り道？」

「ああ」

「何処に行ってたの？」

「だから、服買って…、靴買って……」

「嘘！ あの辺に服屋さんはないよ」

「だから、マクドナルドでハンバーガー食べてたんだ」

「嘘！ あの辺にマクドナルドないよ」

「……」

「正直に言って！」

「あの……。つまり、君の後ろをつけてたんだ」

「私のことを？」

「ああ」

「どうして？」

「その……、可愛い娘がいると思い……」

「ほんと？」

「ああ。実は以前から君のことを知ってたんだ。紅花学園に可愛い娘がいるって。その君を街で見かけたもんだから、そっと後をつけたんだ。すると、あの男に君が絡まれてたんで……」

比呂志ははにかみながら言った。

そう比呂志が言うと、二人はしばらく見詰め合い、そして、程なくそっと唇を重ねた。

「こんにちは」

田中比呂志は、インターホンを押した。

「誰？」

という女の声がした。

「田中比呂志という者ですが、景子さんをお願いします」

「あら、私、景子よ。ちょっと待っててね」

という声が聞こえた。

何しろ、この邸は大きかった。つまり、大邸宅だ。周囲が高いコンクリートの塀に囲まれ、辺りが高級住宅地になっているS街の中でも一際豪邸という菅原邸。ガレージにはベンツが停められている。

「待ってたのよ。入って」

程なく比呂志の前に現われた景子は、比呂志の手を取った。

何しろ、門から玄関扉までは数十メートルはあるだろう。しかも、そこまでは、眼を見張るような日本庭園。まるで、京都の有名な庭園のようだ。

「凄い庭だね」

「驚いた？ でも、こんなの大したことはないよ。裏庭には、プールもあるのよ」

「へえ！」

比呂志は眼をパチクリさせた。

やがて、応接間に通された。

音がまるで立たないペルシア絨毯。高級ホテルのスイートルームに来たようだ。

景子はウイスキーの水割りをグラスに注ぐと、

「飲む？」

と、比呂志に訊いた。

「まだ、未成年だから……」

「構わないよ。学校じゃないんだから」

と、比呂志は景子からグラスを渡された。

それで、比呂志は一気にグラスを口に持って行った。

「比呂志君って、結構いけるじゃないの」

「喉が渴いていたんで」

「そう。でも、その飲み方、男らしいわ。私、男らしい男って、好きなのよ」

と、景子は笑った。そして、

「少し待っててね」

と言っては、部屋を出て行った。

比呂志は周囲に眼を走らせた。

すると、壁には有名画家が描いたような大きな絵が掛けられていた。その絵は、ヨーロッパの

アルプスの山並みを描いたものみたいだった。

やがて、景子が戻って来た。

「お待たせ」

そう言った景子は、ウェディングドレスのような衣装を身に纏っていた。

「どう、似合う？」

そう言っでは、景子は悪戯っぽく笑った。

「素敵だよ」

比呂志の口からは、その言葉が自ずから発せられた。

景子は決して美人とはいえない。しかし、スタイルがよいのと、品の良い顔立ちは育ちの良さが現われていた。そんな景子は、正に紅花学園の女王だった。そして、その白いドレスは、きらきらと輝いていた。

ドレスには、宝石が散りばめた刺繍が施されていた。

このようなドレス見たことのない比呂志があまりに驚いたような様をしているのを見て、景子は、

「びっくりした？」

と、さも機嫌良さそうに言った。

「ああ。こんなドレス、見たのは初めてだよ。でも、高かったら？」

「そうねえ。千万位したらしいわ」

「千万円もしたの？」

「ええ。パパに買ってもらったのよ。比呂志君に見てもらいたくて」

景子のパパは、T化学工業の社長。比呂志のパパもT化学工業で働いている。もっとも、係長だけど。

「僕、こんな凄いドレス見るのは初めてだよ」

「気に入ってもらって、嬉しいわ」

景子は、上機嫌だ。

比呂志のパパは、T化学工業のライバル会社のS化学工業に勤めていたが、T化学工業の攻勢に遭い、あえなく倒産してしまった。

しかし、比呂志のパパは、T化学工業の社長であった景子のパパに目を掛けてもらい、T化学工業に採用してもらったのだ。

そんな比呂志のパパは、比呂志を連れて菅原邸に御礼の挨拶をしに行った。

すると、その時、比呂志が景子の眼に留まり、景子が比呂志に交際を申し込んだのだ。それは、もう半年位前のことだ。

そんな比呂志の学校は東南学園なのだが、景子のパパは東南学園の理事をしている。そんなわけで、比呂志は景子に頭が上がらないのだ。

「比呂志君にプレゼントがあるの」

「プレゼント？」

比呂志は眼をパチクリさせた。

「そうよ」

そう言うと、景子は少し席を外し、やがて、戻って来た。

「開けてみて」

それで、比呂志は包装紙を剥がし、中を開けた。

すると、中にはテニスウェアが入っていた。景子は比呂志がテニス部に入ってることを知っていたのだ。

「わあ！」

と、比呂志は小さな声を上げた。そして、

「これ、僕にくれるのかい？」

「そうよ」

「こんな高価そうなもの貰って、何だか悪いな」

比呂志はそう言ったものの、実のところ新しいテニスウェアが欲しいと思っていたところだったのだ。

「いいのよ、着てみてくれる」

「そりゃ、構わないけど」

そう言った比呂志は、明らかに景子のことを気にしてるようだった。

そんな比呂志の心情を察した景子は、

「分かったわ。少しの間、部屋の外にいるから」

そう言っでは、景子は少しの間、部屋の外に出た。

しかし、比呂志の着替えが終わった頃には戻って来た。

「これを握ってみて」

と、比呂志はテニスのラケットを渡された。

「カッコつけてみてよ」

比呂志はラケットを手にしてはポーズをつくった。

「まあ、素敵だわ！ 思ってた通りだわ！」

景子は嬉しそうに笑った。そんな景子は、本当に愉しそうなのだが、その一方、比呂志は何だか弄ばれてるような気がした。

「比呂志君、来月の最初の日曜日、空いている？」

その日は何だか予定があったような気がしたが、比呂志は思い出せなかった。

比呂志が躊躇っていると、

「空いてるのね。じゃ、テニスに行きましょう。私、その為に、テニスウェア買って来たんだから」

比呂志は承諾した。

しかし、比呂志は後で思い出した。その日は弘子とデートする日だったのだ。弘子に何と言えればいいのだろう……。

「キャ！」

と、弘子は大声を上げた。

「どうしたの？」

という声が飛び交い、一同の眼が弘子に注がれた。

弘子は机の引出しから蜘蛛を床に投げつけた。蜘蛛といっても、おもちゃの蜘蛛だったのだが……。

「すみません。騒がせちゃって……」

弘子は頬を赤らめた。

「教室の中で、大声出さないで！」

大藪治子は怒鳴り声を上げた。黒縁の眼鏡の奥に見える細い眼がいきり立っていた。

「そうよ！ 他人の迷惑というものを考えてよ！」

喜多智子も不満そうに言った。

「すみません。でも、誰かが私の机の中に蜘蛛を入れたのよ」

弘子は些か不満そうに言った。

「あんた、自分で入れたんじゃないの？」

治子は不満そうに言った。

「そんな……」

弘子はそんな治子にたじたじだ。

「そうよ！ そうに決まってるよ！」

と、智子も言った。

治子と智子に強い口調で言われた弘子は、今にも泣き出しそうだった。

すると、弘子の傍らにいた奈保子は、

「誰かの悪戯に決まってるわ！ 自分で入れるわけないよ！」

「そうよ！ 正にその通り！」

と、回りの席からも、そのような声が聞こえた。

それで、治子と智子は渋々と引き下がった。

午後の最初の授業は、先生の都合で自習時間となった。それで、教室のあちこちで、ぺちゃくちゃと女のお喋りが始まっていた。

すると、その時、加藤昌代が、

「ない！」

と、突如、叫び声を上げた。

「どうしたの？」

と、隣席の女生徒の声。

「ないのよ！ あたしの財布が！」

「そんな！」

「財布の中に、家の鍵が入ってるの。あたし、財布が無いと、家に帰れない……」

と、昌代は眼に涙を溜めている。

「これじゃない！」

と、大藪治子が赤い財布を持って来た。

それを見ると、昌代は、

「それ！ それ！ 私の財布よ！ ありがとう！」

と、昌代の表情は、まるで花が咲いたように明るくなった。

「その財布、弘子の机の中に入っていたのよ！」

その大藪治子の声を耳にし、辺りにどよめきの声が聞こえた。

「そんな！ 私、その財布、見るのは初めてです！ 信じてください！」

と、弘子は懸命に言った。

「人騒がせな人ね！ 朝は蜘蛛が入ってたと大騒ぎしたかと思ったら、今度は昌代の財布を盗むなんて……。あんたって、疫病神みたいよ」

と、喜多智子は忌々しそうに言った。

「私、盗んでません！ 絶対にそんなこと、やってません！」

と、蚊の鳴くような声で言っても、鼻息の荒い大藪治子と喜多智子に敵うわけではない。

教室の中では、弘子のことを泥棒扱いしようとする雰囲気は漂い始めた。

すると、

「みんな！ おかしいと思わない！ どうして、財布が弘子の机の中にあるということを治子が知ってたの？」

と、奈保子が言った。

「それも、そうよ！」

と、誰かが言った。

「私もそう思う！」

「私も！」

という声が、あちこちで聞こえた。

すると、治子の顔はみるみる内に赤くなった。

そして、

「ふん！」

と、捨て台詞のような声を遺し、教室から出て行った。

そんな治子の後を、

「待って！」

と、智子が後を追った。

ここは女子更衣室。といっても、体育の授業がない時間は、誰も使わない。

そこに、三人の女生徒が集まっていた。

「どう？ うまく行った？」

菅原景子は言った。

「それが……」

大藪治子は、眼を伏せては申し訳なさそうに言った。

「皆が、弘子に味方してしまって……」

治子は悔しそうに言った。

「私たちのやり方が悪かったのです」

と、喜多智子は項垂れた。

すると、景子は、

「しょうがないね。でも、今度はうまくやってね」

と、言っでは、唇を噛み締めた。

「今度こそ、ドジを踏みませんよ。私たちは！」

と、大藪治子と喜多智子は力強く言ったのだ。

放課後になった。

「弘子、帰ろうよ」

奈保子は鞆を手にしては言った。

「悪いけど、先に帰って」

弘子は言った。

「何か用、あるの？」

「うん」

「そう。じゃ、先に帰るね」

と言っては、奈保子は教室を出て行った。

弘子は奈保子が教室から出て行くと、鞆の中から白い封筒を取り出し、再び読み直した。封筒の中に入っていた便箋にはこのように記されていた。

〈四時に朝霧公園に一人で来て。このことを誰かに言ったら、あんたの秘密をばらしてやるからね S子〉

再び読み直してみても、この文章の意味は弘子には分からなかった。秘密……。秘密って、何だろう。それに、S子って、誰？

弘子は手紙に記されていた通り、誰にも言わずに、一人で朝霧公園に行ってみることにした。朝霧公園とは、紅花学園から歩いて五分位の小さな公園なのだが、周囲が木立に囲まれていて、一旦、公園の中に入ってしまうと、通りから公園の中を覗き見ることは出来ない。しかも、紅花学園を挟んで駅と反対側に位置してる為に、紅花学園の女生徒たちは、あまり訪れる公園ではなかった。

弘子は今、朝霧公園のベンチに腰を下ろし、S子とやらを待っていた。しかし、S子って誰かな。

そう思うと、弘子は些か不安だったが、腕時計を見ると、今、四時を少し過ぎた頃だ。

すると、程なく、「ブーン！」

という音が聞こえ、その音は次第に大きくなって来た。

〈暴走族かな……〉

と、弘子は眉を顰めたが、その音はぐんぐんと大きくなって来た。

やがて、その音は聞こえなくなった。しかし、この近くまで来たことは間違いなかった。

そして、程なく茂みから五人の男たちが姿を見せたかと思うと、弘子に近付いて来るではないか！

それを見て、弘子は些か身の危険を感じ、立ち上がった。

だが、男たちはそんな弘子にぐんぐんと近付いて来た。

そして、その中の一人が弘子の眼前まで来ると、

「江藤弘子かい？」

その男はいかにも若造だったが、黒いサングラスを掛けていた。

「そうよ。何か用？」

弘子につっけんどんに言った。

「大ありだよ！」

そう男が言った時、既に他の四人の男たちは、弘子を取り囲んでいた。

弘子はそんな男たちにどうすることも出来ない。弘子は小刻みに震えたが、そんな弘子の口から言葉は発せられなかった。

すると、その時だ！

「こら！ 何してる！」

という大声と共に、背広姿の男が駆け寄って来た。

その男を見て、弘子は安堵したような表情を浮かべた。何故なら、その男は数学の教師、青木雄介だったからだ！

雄介は、手にしてるピストルを空に向けて、引き金を引いた。

「バーン！」

という音が聞こえた。

「いけねえ。ポリ公だ！」

と、誰かが言うと、

「おい！ 逃げろ！」

と、一目散に五人の男は茂みに飛び込み、やがて、オートバイの音が聞こえ、それは、小さくなって行った。

「ありがとう。先生」

弘子は言った。

「生徒を守るのが、教師の役目さ」

と、雄介は誇らしげに言った。

「でも、先生。どうしてピストル持っていたの？」

「これ、モデルガンさ」

「モデルガンか。でも、凄い音、聞こえたよ」

「それは、こういうわけさ」

と言っては、小型のレコーダーを見せ、

「あの音、録音してあったんだよ」

「それにしても、どうして青木先生が、朝霧公園に来たのかな」

弘子は、それによって助かったのだが、駅と正反対側にある朝霧公園に何故、青木先生が通り掛かったのか、不思議だったのだ。

「それはね。あの近くに曙病院があるのよ。青木先生は曙病院に入院している千佳を見舞いに行ったらしいのよ」

「千佳って、奈保子の従姉妹の？」

「そうよ。でも、勇気がなくて、病院の前でうろうろした挙句、帰ったらしいのよ。全く、ドジ

な先生ね」

「同感！ 正に意気地の無い先生ね。でも、その先生に助けられたなんて、おかしいね」

「本当ね」

と、二人は笑った。

「でも、弘子、どうして嫌がらせばかりされるの？」

弘子は、黙ってる。

「田中君のことね。きっとそうだわ」

弘子は小さく肯いては、

「私もそう思う」

「大藪治子も喜多智子も、菅原景子の子分みたいなものよ。それに、あの暴走族も……」

「菅原さんの仕業だというの？」

「きっとそうよ」

「どうして、私と田中君が付き合ってることを知ってるの？」

「分からない。でも、デートしてるところを見られたのかもしれない」

「そうかもしれないね」

「気をつけた方がいいよ」

奈保子が心配顔で言った。

「よう！ ご二人さん！」

と、小倉紀夫が駆けつけて来る。

「こんにちは。紀夫君」

と、奈保子は笑顔で答える。

「いいもの、見せてあげようか」

と、紀夫は奈保子に言い寄った。

「いいものって、何？」

「見たい？」

「もったいぶらずに、見せなよ」

と、奈保子は詰め寄った。

「これだよ！」

と言っては、紀夫は鞆から小箱を取り出した。

「何よ、これ」

奈保子は、不思議そうな顔をした。

「開けてみてよ」

と、紀夫。

「どうやって開けるの？」

「横にボタンがついてるから、それを押せば開くよ」

奈保子はボタンを押した。

「キャー」

奈保子は叫び声を上げた。おもちゃの蛇が出て来たのだ。つまり、びっくり箱だったのだ。

「こいつ！」

奈保子は怒った。

「ごめん、ごめん」

と、紀夫は言っては、駆け出した。

「おぼえてらっしゃい！」

奈保子がそう言っても、紀夫は振り向こうとはしない。後姿でさえ、紀夫は笑いを堪えているようだ。

「もう、紀夫ったら」

奈保子はぶんぶんだ。

「フフフ……」

弘子は口に手をあてて笑った。

「弘子まで笑って」

「だって、おかしいんだもん」

「紀夫って、時々こういったことをやるのね」

「でも、いいカップルだわ」

「カップル？ 冗談じゃないわ！」

「あっ！ 顔が赤くなった！」

「弘子までからかって！」

「ごめん、ごめん」

「でも、東南学園と隣り合わせって、何だか運命的な出会いがあるものね」

「そうね。私と田中君、奈保子と小倉君」

「あいつとは、関係ないの」

と、奈保子は口を尖らせた。

「でも、もし、両校が隣り合わせでなかったなら、私と田中君がデートすることなんて、なかったと思うな」

「弘子にとって、ラッキーということね」

「でも、田中君には、菅原さんがいた。私、菅原さんが怖い……」

「大丈夫よ。私がついているから」

と、奈保子は言った。

「そうね」

と、弘子は安心そうに言った。しかし、奈保子は、
〈どうして私、こんなことをやってしまったのかな〉

と、内心「しまった」と、舌を出したのだ。

「バイバイ」

ここで、道が二手に分かれてしまう。奈保子は右、弘子は左に曲がるのだ。

いつも、ここで別れることにしている。今日もお決まりの「バイバイ」を言っては、二人は別

れた。

周囲は新興住宅街だけあって、まだまだ自然のままの山林が遺されていた。奈保子は、その山林の中の道を通らなければならなかった。といっても、この道は近道だった。住宅地に通じる幹線道路は別にあったのだが、この道を歩いて行く方が随分と早く帰れるのだ。だが、人通りが少ない為に、小学生などは、一人歩きしないようにとされているらしい。

「私、小学生じゃないもん！」

と、奈保子は言うが、以前痴漢が出たそうで、女の人一人歩きも気をつけてくださいと、言われてるらしい。

「私、女の人じゃないもん！」

とまでは言わないが、まだ五時になっていない。辺りはまだまだ明るく、それ故、痴漢には遭わないだろうと、奈保子は高をくくっていた。もっとも、この道に入ると、かなり薄暗くなるのだが……。

奈保子は、この林の中の道を三十メートル程歩いた。

すると、その男は辺りを十分に見回し、辺りに人がいないことを確認した。もっとも、奈保子以外だが。

奈保子が足早に歩いているので、茂みの中から尾けるのは、決して楽ではなかったが、所詮、女の足に負けることはなかった。そのサングラスの顔は、知ってる人が見ても、「あんた、誰？」と言うに違いない。それ程、そのサングラスは、その男を別の男に変えていた。

男は自信を持っていた。たとえ、犯行現場を見られても、素顔の俺のことは、分かりはしないと！ だが、用人するに越したことはない！

男は辺りに人がいないことを確認すると、茂みから飛び出し、奈保子に襲い掛かり、首を絞めようとした。

奈保子は、

「キャー！」

と、叫び声を上げ、男の方を振り向いた。男は奈保子の顔を真正面から見てしまった。

「何だ、こいつ」

男は怪訝そうな顔をした。そして、

「こいつじゃない……」

と、呟いた。

「キャー」

という叫び声と共に、奈保子は男を蹴っ飛ばした。

「いてっ……」

と言っては、男はあっという間に逃げて行ったのだった。

「『こいつじゃない』と言ったのね」

「そうよ。あいつ、そう言ったのよ！」

と、奈保子はお茶を飲みながらそう言った。

「じゃ、別の人を狙っていたということね」

と、良子。

「多分、そうだと思うな」

「人違いでよかったね」

「どうして？」

「もし、奈保子を狙っていたのなら、奈保子、殺されていたかも」

「でも、襲われたことには違いない」

「きっと、奈保子、魅力がなかったのよ」

「余計なお世話だよ」

と、奈保子は脹れ面だ。

「待てよ……」

奈保子は、白い封筒が入っていたことを思い出した。あの封筒も間違っって私の鞆の中に入れていたんだわ。今日だって、あの道の手前で、弘子と別れた。

そうだ！ 私と弘子を間違えたんだ！ きっとそうだわ！

「昨日、私、襲われたのよ」

「襲われた？」

「殺されそうになったのよ」

「え！」

「冗談よ！ でも、半分は本当よ！ 首を絞められて、その時、その男、私の顔を見たの。すると、こいつじゃないと言ったのよ」

「人違いだったということ？」

「まあ、そんなところね。誰を狙っていたんだと思う？」

「さあ……」

「弘子、あなたを狙ってたのかもしれない」

「まさか……」

「本当よ。あの道の手前で弘子と別れて、私は林の中の道に行ったじゃない。二人とも、セーラ一服だったから、間違えても不思議ではない」

「……」

「きっと、弘子を襲うつもっりだったのよ」

「怖いわ」

「弘子、美人だし、スタイルもいいし……。狙われても、不思議ではないよ」

「そんな男、早く捕まってもらいたいな」

「警察に届けたのよ。そしたら、この前、公園で女子高生が首を絞められ殺されたんだけど、犯人がまだ捕まってないらしいわ。もしかしたら、そいつかもしれないと言ってた」

「早く捕まてもらいたいな」

「怖い世の中になって来たな」

奈保子はしみじみと言った。

「この封筒、見てみて」

と、奈保子は白い封筒を弘子に見せた。

「読んでみて」

と、奈保子は弘子に促した。

〈これ以上、彼に近付かないで！ 彼は私のものよ！〉

「これ、きっと弘子宛ての手紙よ。私の鞆と弘子の鞆と間違えて入れたんだと思うよ」

「……」

「菅原さんよ！ 菅原さんが入れたのよ！」

弘子は黙っていた。そんな弘子は、今にも泣き出しそうだった。

「負けちゃ駄目よ。自らの信念を貫くのよ」

奈保子は力強く言った。そう奈保子が言うと、弘子は微笑を浮かべたようであった。

「河辺さん。あなた掃除当番よ。忘れないでね」

と、担任の伊藤芳江が念を押すように言った。

「はい！」

と奈保子は声を弾ませて言った。

一ヶ月半に一度のペースで、掃除当番が回って来る。このクラスでは、一人で掃除をするのだ

。

大勢でやるより、一人の方がいい。その分、順番が回って来るのが遅いから、その方がいい。と、誰かが提案した。そして、その案が多数決で可決されたのだ！

掃除といっても、教室のゴミを箒で掃き、ゴミを焼却場にもって行く。それだけでいいのだ。二十分もあれば、充分に出来る。放課後の二十分。それだけなのだ。

最後の授業が終わったが、教室内には、まだお喋りをしている女の子が残っている。

だが、十分、十五分経つに連れ、一人、また一人と去って行った。

掃除開始は四時と決められていた。四時までには、掃除担当者以外の生徒は、教室から出て行かなければならなかった。

四時になると、奈保子は掃除を始めた。机を動かしては、ゴミを箒で掃いた。そして、一隅にゴミを集めては塵取りに入れ、ゴミ箱に入れた。

「これでよし」

奈保子は一息つくつと、ゴミ箱を焼却場に持って行き、ゴミを捨てた。

「万歳！ やっと終わった！」

奈保子は、額の汗を拭った。薄らと汗を掻いていたのだ。

掃除が終わった後は、担任の伊藤芳江に報告することになっていた。

「先生！ 終わりました！」

奈保子は言った。

「お疲れ様」

伊藤芳江は、にこやかに言った。

奈保子は教室に戻り、鞆を手にとった。

「さあ、帰ろうかな」

奈保子はまるで花が咲いたように、生き生きとしていた。やっと、嫌な掃除を終えたからだ。

奈保子はゴミを掃いて、その埃を吸うのが、嫌だった。

しかし、これから一ヶ月半、掃除をしなくていいと思うと、まるで待ちに待った花が咲いたように、気分が明るくなるのだった。

奈保子が校舎を離れ、校門に向かって歩き出し、後少しで校門を出ようとしたその時である。

「河辺さん！ 河辺さん！」

と、誰かに呼び止められた。

それで、奈保子は振り返ると、伊藤先生が奈保子に手招きしてるのだ。

「何ですか、先生」

奈保子は大声で伊藤先生に呼び掛けた。

「悪いけど、戻って来てよ」

先生は言った。

それで、先生の後に従い、教室に戻ると、先生はいきなり、

「まだ、掃除終わってないじゃない」

そう言われ、奈保子は辺りを見回すと、至る所にゴミが散乱していた。まるで、ゴミ箱がひっくり返されたように……。

「先生、私、きちんと掃除したのですが」

と、いかにも決まり悪そうに言った。

「言い訳はよしなさい！ 本当はさぼっていたんじゃないの」

と、先生は奈保子を睨み付けた。

「違います！ 私を信じてください！ 誰かがわざとこんなことを」

奈保子は、必死で弁解した。

「分かったわ。信じましょう。でも、悪いけど、もう一度してよ」

それで、結局、奈保子は再び掃除をすることになった。辺りに散乱してるゴミを再び箒で掃かなければならなくなったのだ。

〈誰がこんなことをしたんだろう……〉

そう思うと、奈保子は悔しくて、泣きたい位だった。

「それは、ひどい」

弘子は眉を顰めた。

「ひどいでしょ。私、許せない」

奈保子はプンプンだった。

ここは、駅前のマクドナルド。奈保子と弘子は、ハンバーガーを食べながら、奈保子が昨日の災難を話してるところだった。

「よう！ ご二人さん！」

と、いつの間にやら、小倉紀夫がやって来た。そして、奈保子と弘子が座ってるテーブル席に腰を下ろした。

「何の話だい？」

と、紀夫が訊いた。

それで、奈保子は昨日の災難を話した。

すると、紀夫は、

「ひょっとして」

と、首を傾げた。

「ひょっとして、何なのよ」

と、奈保子。

「俺、思い当ることがあるんだ。奈保子たちのクラスに、黒眼鏡を掛けたツンとしてのデブがいるだろ」

「大藪治子のこと」

「そう。その大藪治子らしき女が、昨日、ゴミ焼却場からゴミを袋に入れては、校舎に戻って行くのを見たんだよ。

焼却場というのは、ゴミを捨てに行く所だろ。それなのに、ゴミを袋に入れては持って行くなんで、変なことをやるなと思ってたんだよ」

東南学園と紅花学園は、隣り合わせになっていて、紅花学園のゴミ焼却場は、東南学園から見ることが出来るのだ。

「その話、本当なの？」

と、弘子。

「本当さ。見間違えないさ。俺の視力は、1・5もあるんだぜ」

奈保子と弘子は、顔を見合わせた。

「大藪治子だわ。あのゴミを撒き散らしたのは」

と、奈保子は口を尖らせた。

「ひどいことをする」

と、弘子は不満そうに言った。

「いいことがあるよ。今度のホームルームで、このことを皆の前で言ってやりましょうよ」

「それ、いい案だわ」

と、弘子。

「俺もそう思うよ」

と、紀夫も相槌を打ったのだった。

紅花学園では、月曜の午後の最初の授業がホームルームだった。ホームルームとは、学習とは別に委員を決めたり席替えをしたりする時間で、週に一度行なわれていた。

奈保子は、3年B組だった。

B組には、弘子とか大藪治子、喜多智子たちがいた。菅原景子は、3年A組だった。

「何か意見がある人！」

担任の伊藤芳江が言った。芳江は既に四十を超えているが、本人はまだ三十代のつもりだった。着てる服なんかは、とても若々しいものだった。

「何かありませんか」

誰も、意見を出さない。もし、何もなければ、紅花学園の歴史のビデオなんかを見たりする。これが、ホームルームのお決まりのパターンだった。

そう芳江が言った後、まだ少しの間、誰も手を上げなかったが、やがて、一人の女生徒が手を上げた。それは、河辺奈保子だった。

「先生！」

と、奈保子は手を上げた。

「河辺さん、どうぞ」

「先週の水曜日、私が掃除当番だったのですが、私が掃除を終えた後、誰かがゴミを撒き散らしました」

「まあ、そんなひどいことを……」

と、芳江。

「間違いじゃないの？」

と、誰かが言った。

「いいえ。間違いじゃないわ！」

奈保子は、甲高い声で言った。

「私が河辺さんから掃除が終わったという報告を受け、教室に行って確認したのよ。すると、ゴミが散乱してました。あのゴミの散乱の仕方は、誰かが撒き散らしたと言わざるを得ないのよ。

その件に関して、心当たりある人は、名乗り出てください」

と、芳江は生徒たちに問い掛けるかのように言った。

だが、誰一人として、何かを言おうとする生徒はいなかった。

だが、やがて、

「先生！」

と、江藤弘子が手を上げた。

「江藤さん、どうぞ」

「私、その件で重大な話を入手しました。というのは、大藪治子さんが、河辺さんが掃除を終えた後、ゴミ焼却場からゴミを袋に入れては、教室に戻って行くのを見た人がいるのですよ。それに関して、大藪さんから話を聞きたいのですが」

と、弘子は大藪治子を見やった。

すると、大藪治子は、まるで怒ったように、顔を赤くさせていた。

「大藪さん、説明してください」

と、芳江は治子を見やった。

すると、治子は、

「私、何のことを言ってるのか、分かりません」

と、今度は毅然とした表情を浮かべては言った。

「そんな筈はありません！ ゴミ焼却場で大藪さんのことを見た人がいるのです！ きちんと説明してください！」

弘子は、些か声を強くさせては、治子を睨み付けるように言った。

「その話、出鱈目だよ！ 人違いだよ！」

と、治子は怒ったように言った。

すると、その時、

「いいえ！ 人違いじゃないわ！」

と、突然声を出したのは、加藤礼子だった。

礼子は大人しくて、あまり、目立たない生徒だった。その加藤礼子が突如、そう言ったので、皆は驚いたような顔を浮かべている。

「加藤さん、話を続けてください」

芳江は言った。

「河辺さんが掃除当番だった日、私、忘れ物があったことを思い出し、学校に戻ったのです。時刻は四時二十分頃で、もう掃除が終わった頃だと思い、教室に入ろうとしたのです。ところが、大藪さんがいるじゃないですか！ 今日河辺さんの掃除当番だったのに、どうして大藪さんがいるのか、不思議に思ったのですが、すると、大藪さんは何とビニール袋に入っていたゴミを教室の中に撒き散らしているではないですか！ 私、もうびっくりしてしまい、声を出すことなく、そのまま逃げるようにして、その場を離れました。そして、このことは黙っていようと思っていたのですが……」

と、いかにも言いにくそうに言った。

「大藪さん。もう誤魔化すことは出来ませんね」

と、芳江は大藪治子を見やってはきっぱりとした口調で言った。

治子とはといえば、何も言おうとはしなかった。ただ、唇を噛み締めてるばかりだった。

そんな治子に、芳江は、

「大藪さん！ 今後、こういったことは、絶対にしないように。どういった訳があるのか知りませんが、皆は同じクラスメートじゃないですか。クラスメートは助け合わなければならないのよ。大藪さん、分かりましたね」

芳江の言葉に、治子は何も言おうとはしなかった。ただ、唇をわなわなと震わせてるばかりだった。

「クソ！」

治子は、地面を蹴った。

「頭に来るね」

と言ったのは、喜多智子だ。

ここは、校庭の一隅。今はホームルームが終わった後の休み時間である。

「弘子が余計なことを言った為に、とんだ恥を搔いてしまったよ。それに、加藤礼子なんかに見られてしまって……」

「元とはといえば、奈保子が悪いのよ。弘子の肩ばかり持つから。正に、奈保子と弘子は、私たちの邪魔者よ」

そこに、菅原景子がやって来た。

「あんたたち、うまく行った？」

「それが、今、ホームルームで、散々な目に遭って来たところです」

と、治子が項垂れた。

「奈保子をひどい目に遭わす筈が、どうもうまく行きませんでして……。それどころか、こっちが先生から散々大目玉喰らってしまって」

「分かったわ。私に考えがあるから。治子と智子はよくやってくれたわ」

「別に感謝される程のことでも……」

そう治子は言ったものの、その表情は、景子に褒められ、些か満足そうであった。

「弘子、今度の日曜日の約束のことだけど、都合が悪くなってしまったんだ」

と、比呂志は申し訳なさそうに言った。

「どうして？ 何があったの？」

弘子は納得が出来ないように言った。

「……」

比呂志は何も言わない。

「菅原さんね」

弘子がそう言うと、比呂志は黙って肯いた。

「私と菅原さんのどっちが大事なの？」

「すまん、弘子……」

「何とか言ってよ」

「俺の親父、T化学工業で働いてるのを知ってるだろ。菅原景子の父親は、T化学工業の社長なんだ。俺の親父が働いていた会社は倒産して、親父が路頭に迷っていた時に、菅原景子の親父に助けてもらったんだよ。それ故、景子の親父は、うちの恩人なんだよ」

「そんなこと、関係ないよ。親は親、子は子よ」

「そうはいかないんだ。親父は俺が景子に気に入られてることを大変喜んでいるんだ。そのおかげで、会社に安閑として働けると言ってさえいるんだ。もし、俺が景子の機嫌を損ね、景子の親父に苦情が行ったら、親父は滅になりかねない。親父の為にも、景子のことは無視出来ないんだ。分かってくれよ」

弘子は唇を噛み締め、何も言うことは、出来なかった。

木枯らしが吹く季節とまでは行かないが、クラブ活動を終え、下校する頃は、かなり暗くなっている。陽が暮れるのが随分と早くなった。

もっとも、四時を過ぎたばかりでは、運動部の練習は今がピークで、運動場ではトレーニングウェアに身を包んだ乙女たちの華やかな歓声が聞こえている。

しかし、こういった華やかな雰囲気似合っていない乙女がいた。

それは、江藤弘子だ。弘子はある人の帰りを待っていた。その人は、菅原景子だった。

弘子は、学園から少し離れた道路の片隅で、校門を見据えていた。

〈来た！ 菅原景子だ！〉

景子は、大藪治子、喜多智子、その他、菅原グループの女の子たちを従えて、校門から出て来た。

そんな景子たちを眼に留めると、弘子は足早に景子に歩み寄った。

「菅原さん、話があるの」

と、弘子は毅然とした表情で言った。

景子の眼は、弘子に注がれた。治子たちの眼も同様だ。

「何の話？」

景子は冷ややかに言った。

「他の人は、離れてくれないかな」

と、弘子は言った。

「何言ってるの！ この女！」

大藪治子が弘子を睨み付けた。

「ふざけたことを言うんじゃないよ！」

喜多智子が弘子に攔み掛かろうとした。

「菅原さんと二人で話をしたいのよ」

弘子の眼は、じっと景子を見詰めていた。

「分かったわ。あんたたち、退がってて」

弘子は景子を運動場の鉄棒がある辺りにまで連れて行った。辺りには誰もいずに、夕日が校舎を赤く染めていた。

「話って何？」

景子はつんとした表情と口調で言った。

「田中比呂志君のことよ」

「それがどうしたの」

景子は冷ややかな表情と口調で言った。

「別れて欲しいの」

「別れる？」

「そう。きっぱりと別れて欲しいの」

「あんたに、そんなことを言われる筋合いはないわ」

「比呂志君、あなたと付き合うのを嫌がってるわ」

「馬鹿馬鹿しい！ あんた頭、どうかしてるんじゃないの」

「本当のことよ。お父さんの為に、菅原さんと付き合ってると言ってたわ」

「そんなこと、あんたに関係ないことだわ」

「親は親、子は子よ。親の力で愛も奪うなんて、卑劣よ」

「あなた、今、何を言ってるのか分かってるの。正気なの？」

「正気よ。本当のことを言ったまでよ」

「あのね。比呂志君は私のことを好きなのよ。この前の日曜日に二人でテニスをしたわ。その後、私の別荘で愛し合ったのよ。これが、全てよ」

「……」

「比呂志君はね。あなたじゃなくて、私を選んだのよ。分かった」

そう言っでは、景子は弘子を睨み付け、そして、勝ち誇ったような表情を浮かべた。

すると、弘子の言葉は、詰まった。

そんな弘子に、景子は、

「話って、これだけ？」

弘子は、何も言うことは出来なかった。

「あなたは、比呂志君のことをきっぱりと忘れることね。余計なことをしない方が、あなたの為よ」

そう言うと、景子はゆっくりと校門に向かって歩き出した。弘子はそんな景子に、何も言うことは出来なかった。

「馬鹿やろう！」

そう叫んでみたかった。

しかし、眼が眩むような失意の気持ちが弘子の声を押し潰してしまった。

夕陽を浴びた菅原景子が校門を通り過ぎた時、弘子は砂場に跪いては、眼頭が熱くなった……

。

「弘子、くじけちゃ駄目」

奈保子は落ち込んでいる弘子を励ました。

「田中君、弘子を好きなのよ。一番大切に思ってるのよ。だから……」

「……」

「田中君は、田中君の家庭を守りたかったのよ。だから、仕方なかったのよ」

「だからといって、菅原さんの別荘まで行くことはないと思う」

「だから、菅原さんが強引に誘ったのよ。そうに違いないわ」

「菅原さんが、憎い……」

そう言っでは、弘子は唇を噛み締めた。

「もう少しの辛抱よ。田中君が学校を卒業して、東南学園と関係がなくなれば、菅原さんとも関

係がなくなるよ」

「お父さんのことがあるでしょ」

「親は親よ。高校を卒業すれば、田中君は自立出来るよ」

「そうかしら」

「そうよ。そうなるよ」

と云っては、奈保子は笑った。すると、弘子も笑ったのである。

「よかった、弘子、元気になったみたい」

「だって、奈保子の話、面白いんだもの」

「私だって、何を言ってるのか分からないのよ。支離滅裂な話ばかりして」

「そこが面白いのよ」

と、弘子は再び笑った。

ここは、駅前のマクドナルド。二人の愚痴は、この場所で始まるとでも言える神聖なマクドナルドと言いたいところだが、それを騒音？がぶち破った。

「よお！ ご兩人！」

と、小倉紀夫と、ぱったりと顔を合わせてしまった。

「いきなり、現われないでよ」

と、奈保子は笑いながら言った。

「通学路が同じだから、仕方ないよ。ところで、ホームルーム、どうだった？」

「成果、大ありよ」

「小倉君のお陰で、大藪治子をやっつけることが出来たのよ」

弘子は声を弾ませて言った。

「やはり、大藪治子が、ゴミ撒き散らし犯人だったんだな」

「そうよ」

と、弘子は肯いた。

「やはり、そうだったか。」

あいつ、随分と悪事を働いてくれるよ。大藪治子、暴走族の仲間みたいだな」

「暴走族の仲間？」

「ああ。この前、オートバイの後ろに乗って、キャーキャーと、騒いでたよ。あれ、大藪治子に間違いはないよ。紅花学園にも、とんだ生徒がいるもんだね」

「全くね。本当に呆れちゃうよ」

と、奈保子。そして、

「公園で弘子を襲った暴走族、治子が襲えと言ったんじゃないかな」

「そうかな」

と、弘子。

「そうに決まってるよ」

と、奈保子。

「僕もそう思うよ。正にとんでもない女生徒だよ」

と、紀夫は吐き捨てるように言った。そして、
「やられてばかりじゃ駄目だよ。やり返してやれよ」
「男の喧嘩とは違うのよ」

と、奈保子はおどけたような仕草をした。
「そうよ。乙女と野郎は違うのよ」
と弘子は言い、三人は笑った。

「バイバイ」

「気をつけてね」

奈保子と弘子は、いつもの分かれ道で手を振った。

ここで、奈保子は右、弘子は左に進むのだ。ここから、二人の家は、さほど遠くない。

その男は茂みの中から辺りを窺った。辺りに人影はない。

「今度こそ、逃がさないぞ！」

男は心の中で、自らに言い聞かせた。

「この前は、とんだ人違いをしちまった。今度こそ……、今度こそ、あの白い足、愛くるしい笑顔は、この手で永久に眠らせてやる！」

男は興奮を抑えることは出来なかった。

膝はガクガクと震えていた。心臓が高鳴っているのがはっきりと分かった。誰かがいれば、「気分が悪いのですか？」と、声を掛けて来たかもしれない。

しかし、誰もいやしない。この茂みの中に潜んでる奴なんているもんか！ この俺以外に！

ブーン、というオートバイの音が聞こえ、その音はあっという間に大きくなった。どうやらこちらに近付いてるようだ。

そして、いつの間にやら、オートバイに囲まれたスポーツカーの中からサングラスの男が飛び出し、奈保子と弘子を無理矢理スポーツカーの中に入れ、去って行った。それは、まるで一瞬の出来事のようにであった。

「助けて！」という悲鳴は聞こえた。

だが、誰も助けやしない。茂みの中に潜んでいる俺以外に、誰がその声を聞くだろうか。

男は正に啞然とした表情で、その場面を眺めていた。そして、呟いた。

「どうなってるの？」

「やっと気付いたかい？」

知らない男が言った。

眼が覚めた奈保子は、

「ここ、何処なの？」

「河辺さん、やっとお眼ざめかね」

その男は言った。

横を見ると、弘子はまだ眠ってるようだ。

「弘子、起きてよ！」

と、奈保子は弘子の身体を揺すった。

すると、弘子は眼を開けた。

「奈保子じゃない！ 一体、どうしたって言うの？」

「ご両人、やっとお眼ざめかな」

男はにやにやしながら言った。

「あんた、誰？ 私たちをどうしようと言うの？」

と、奈保子は男を睨め付けた。

「あんたたちは、邪魔者なんだよ。紅花学園にとって」

「紅花学園にとって？」

と、奈保子は首を傾げた。

「紅花学園は私たちの学校よ。あんたなんかと関係ないわ！」

と、弘子。

「紅花学園であんたたちを邪魔に思ってる方がいるんだよ。その人の為にも、あんたたちを生きしておくことは出来ないのさ」

と、男はにやにやした。

〈私たちが邪魔？〉

奈保子の頭には、自ずから菅原景子のことが思い浮かんだ。

「生かしておけないって、殺すつもり？」

と、弘子。

「殺しはしないさ。学校をやめてもらいたいのさ」

「そんなこと、出来るわけがないでしょ」

と、弘子は金切り声で言った。

「それが、出来るのさ。おーい！」

と、男が合図した。

すると、チンピラ風の男が四人現われた。そいつらは、皆、サングラスを掛けていたが、皆、二十歳を超えてるように見受けられた。

奈保子と弘子は、後退りした。

そして、

「私たちをどうしようと言うの？」

奈保子は、ヒステリックに言った。

だが、誰も助けに来はしない。

「あんたちち、警察に捕まるよ」

と、弘子。

「警察？ 誰が警察に知らせるんだよ。それに、そんなことをすれば、恥をかくのは、君たちだぜ！ おーい、やっちまえ！」

と、親分格の男が、力強い口調で言った。

サングラスを掛けた男の一人が、奈保子の腕に触れた。

「いや！ 触らないで！」

奈保子は、男に平手打ちを喰らわせた。

「こいつ！」

男はむきになった。

「誰？」

弘子は、ドア越しにそとこちらを覗いてる顔が眼に留まった。

〈大藪治子だ……〉

治子は薄らと笑みを浮かべていた。

男は無理矢理奈保子を床に押し倒した。

その時だ。ドカドカという音と共に、男が中に入って来た。数学の教師、青木雄介だ！

それに、小倉紀夫も入って来た。

「こら！ お前たち、何やってるんだ！」

雄介が甲高い叫び声を上げた。

「いけねえ、逃げろ！」

親分格の男が合図した。

すると、その男たちは、一目散に退散し、オートバイの轟音が聞こえたと思うと、その音はあっという間に小さくなり、程なく聞こえなくなった。

「何て逃げ足の速い奴等だ」

雄介は呟くように言った。

「大丈夫かい？」

紀夫は、心配そうに言った。

「大丈夫よ。でも、危ないところだった。小倉君たちが来てくれなかったら……」

奈保子は、心臓が激しく鼓動してるのが分かった。奈保子は興奮のあまり、泣き出しそうであった。

「その先は言うなよ。悪夢だったんだ」

紀夫は言った。

「大藪治子よ。治子がドアの隙間から、覗いていたのよ！」

弘子は、声を震わせながら言った。

「何て奴だ。大藪治子は！ 退学だよ！ 退学。そうに決まってら！」

と、雄介は叫んだ。

エピローグ

その男は、奈保子、弘子、そして、青木雄介、小倉紀夫たちが、古ぼけた倉庫から出て行くのを物陰からじっと見詰めていた。

「俺が通報しければ、今頃あいつはやられていただろう。だが、やるのは俺なんだ！俺がやるまでは、誰一人として指一本触れさせやしないさ！」

男はそっと呟き、じっとその娘を見詰めていた……。

青木雄介が、職員会議で大藪治子の悪行を話したにもかかわらず、治子は退学になるどころか、停学すらならなかった。きっと人違いだで、事を処理されてしまったのだ。

「まあ、ひどい……」

奈保子は不満そうだ。

「人違いだなんて、私のことを馬鹿にしてるわ！」

弘子も口を尖らせては怒っている。

「菅原景子よ！菅原景子が手を回したのよ！」

菅原景子の親父は、東南学園の理事で、その力は紅花学園にまで及んでいるとのことだ。

「何てことだ」

と、口走ったのは、青木雄介だ。

「世の中、綺麗事だけでは済まないんだ」

と言ったのは、小倉紀夫だった。

「あんた、なかなか分かった口振りじゃないの」

奈保子は紀夫をからかった。

すると、紀夫は頭を掻いた。

「いけない！忘れてた！」

と言ったのは、青木雄介だ。

「何を？」

と、奈保子。

「千佳ちゃんのお見舞いさ！」

奈保子たちは笑った。その笑いは大きな渦となり、辺りに浸透して行ったのだった……。

〈終わり〉

この作品はフィクションであり、実在する人物、団体とは一切関係ありません。